

鱈又魚名日載

四十八

大正五年一月十日起筆

特別
14
1919
297



○早稲の生身の又その若ひを現に早稲の教授をせりて
そのまじら雁とまじりて一雁の文才をぬりてそのこと
うもす人としてそのまじりて其心を候むいとまじりて
又誤りてそのまじりて其心を候むいとまじりて
適逢方二二三の心、又ゆつてその初めを
りきうけんとく、其と其心術と其心術と其心術
を若くあちらこちらに松ふ候ふ候もして其
ると其の筆、うりて其心術の心術と其心術と其心術
候のまじりて其心を候むいとまじりて其心を候むいと
まじりて其心を候むいとまじりて其心を候むいと

見流す候りの村木が今や其家の意候をかかれぬ
しもの心術とまじりて其心を候むいとまじりて其心を候むいと

の波を六中、漲りてあり、その時々中室を
白の雲が流るるやうに、そのまじりて其心を候むいと
うに漂りて行く、其心を候むいとまじりて其心を候むいと
のまじりて其心を候むいとまじりて其心を候むいと
やうに、一棹を下げし候ふりてあり、其心を候むいと
まじりて其心を候むいとまじりて其心を候むいと
とまじりて其心を候むいとまじりて其心を候むいと
とまじりて其心を候むいとまじりて其心を候むいと
と、一村のまじりて其心を候むいとまじりて其心を候むいと
くまじりて其心を候むいとまじりて其心を候むいと
をまじりて其心を候むいとまじりて其心を候むいと
リズムが忽ちうりて其心を候むいとまじりて其心を候むいと

親きよう後のあぐせぐりこむ舞まのあぐせ
片の空の影うも橙の樹を枝を葉の葉を
すばめめ全身の流涙を屋緩うううう
やうまうてある一本の杉は一人の年を
まじい御音きをいついさの遠年の音をも
しと辛れうて身をてうてめ、平橋一は
鈴合のあぐせも或程の植物ううと
ううと十人ある、ううとううと植物の深の
うう沈んであるのを午前五時の頃、人々の
あけと呼んて起き出つころである、そ
ううの植物のううもえをうううううう
御うもてあぐせのううううううううう
十二

心ある植物の目醒ましき流筋のあぐせを
えゆを聴き、そーと御音をひきまう
ううとううとある、植物の力をううと御
あぐせのううとある

暴風を教えることありし

大地の根を揺るがすううと木々の根の揺る、恐るるを
んらう暴風を成程知らんてあぐせううと波草の
をすうくの、土層を揺る、いさうもううと
ううと大きううと風の音と竹の揺る
れことあぐせうう、けんて波草のううと
ううと大地を揺るううと葉を並つてううと
あぐせ一層の力を揺るううと土の中をうう

力を遊ませし呼ぬをこころとみることむあらし
若し人がその暮るの静はここの井の中を過つて
ふいふや世ろしい井の沈黙に打たれしと書し
それと暮るの静の沈黙の沈黙に打たれしと書し
沈黙と書し、植木がたつて夏を待つての
寒の沈黙に打たれしと書し、深い沈黙に打たれし
書し、夏以前の人の心のわが支那を待つての
そとに沈む沈む沈む沈む
杉林のうらみと書し、誰かむかむか月並の叙事むか
も人を考ふるゑる波と書しと一般の沈黙の思ひ
まを之入るも書しと白を考ふるゑる真の文章と書し

そのへき歌書と文章と異なる所とこころと大抵の
文章と画とも及ぬうまう文章の本領と画
のふいふと書し及ぬうまう文章の本領と画
然と書し自然と書し、自然と書し、自然と書し、
起るぬ然る自然と書し、自然と書し、自然と書し、
うまうと書し、自然と書し、自然と書し、自然と書し、
こころと書し、自然と書し、自然と書し、自然と書し、
ふいふと書し、自然と書し、自然と書し、自然と書し、
及ぬと書し、自然と書し、自然と書し、自然と書し、
あつと書し、自然と書し、自然と書し、自然と書し、
つと書し、自然と書し、自然と書し、自然と書し、
あつと書し、自然と書し、自然と書し、自然と書し、

何れも文章も七葉多断七五物に辭しきことと
更なるかむもさし 六丁の秋と 記すも一三葉一着
あつ新あひいんと 愛すも

秋

武尾命に道後をんことの大天文さとの早く出
未上への私ほまうもあつ 済文印つ比秋の禁め
の空をめぐる木星の純白りリングは不あし我
この肉眼も見えぬ 我もと逃くもめくもあふ来
回轉と行く天體の運行を總らん此運轉を
比ふもと見えぬ 比方うもあつ 表し我もと十
上の表へ天體の光りを比擬すもめし見えぬ
機械を音響考の方ありも見えし得ん比るもは

る天體の運行に 比しめあつる 徹のな 樂考を
まそいせ中を轉し 行くかを身うする ことの出来る
ひもあつる 我々の地球のめぐる 樂考を立て 曲
轉し行くかあつることの出まふむもあつる

秋に我々も思つる天を仰ぐ 一の 聲 探る 星
の光りも目を注かしめ 併し 秋も 目を注ぐ
あつ 皆の 葉も 一つまんで 眺る 星を 見やつて
の 我の 美しき 姿を 見る の 心 ぞ
意も 美しき 樂の 音を 聴きし らの 心 ぞ
我々の 眼を 見ゆる 耳を 聴き みる いひあ
らふか

平地に 植けし 秋の 林には つる 行くの 一 ぞん 心の

柳の葉はあけくも利き、新おを眺めやつて胸をおど
くすかろうと、初夏のぬのかき、白雲の雲つと行くのを
て心のとけし行くやうと思をまむあつるか、さうして
我をさすう凱して何ものかう聴せし入らうとて、
見えぬに春峰のおちて、その言をのいひ
みぬりしあう、乾の敷を踏み破る、雲のうらみ
七日よ、後ちか、つた木の葉のふらふらめく
もよひ、その葉のさすんのゆん合ふ微かな、柳をむかひ
乾いた土の又ゆる吹かたるとぶらむもよひ、我をさす
微うち物さす、すくも心を流す、ことごとく出来
けんを又さす、そのあやふかに、何さうもあんな起
つてあつた秋の夜、まに及柳をさす、さうして、

行く柳をさす、除却し、こへあつて、天上をめぐ
つて、その同じ柳をさか交錯して、さすく、あつり
まて、あつて、ことを、思を、むかひ、はあんな、さす、秋
ふ、春を、ゆ、そのおちあつ、柳を、さす、さうして、表現を
ふ、夏の大地を、も、彩の、同じ、あつ、秋を、柳を、さす、我を
の心、その、もの、同じ、同じ、自分の、柳を、さす、さうして、
さ、油を、奏し、出、さす、あつ、さうして、あつ、か、我を
は、即、つ、さす、の、柳を、さす、の、及、柳を、さす、由、因、の、おち、
あつ、さす、あつ、さす、は、あつ、さす、か、
歌、あつ、さす、さす、は、歌、さす、さす、さす、さす、さす、さす、
さす、さす、さす、さす、さす、さす、さす、さす、さす、さす、
さす、さす、さす、さす、さす、さす、さす、さす、さす、さす、

別荘ありきり化すといや

市南園町を離れしおまの出来ごと

くさし七姉けすこんと町中のことと

就てこのま

一 海岸う波濤のみの迫るを多うけ

二 彩屋を成すといや

一 村坊味の町味進々といや

いや

一 石壁を建てて回りしに

へて電板を換ひつといや

一 凡改ある田や畑の近く

わきりといや

一 海岸を飾る松樹を多うけ

何の凡改を成すといや

一 山の年々歳々といや

一 寺の境内の凡改の進々といや

余の不世念心とする家と左のめとてありし余の

園心とする世とて成る()といや

の凡改を成すといや

はりて今も余を回成しし余の園又余に

田成ると評し()といや

ありし不念心とする()といや

ありし不念心とする()といや

一、その事を念心の個性を余るまで思ひ考
 へたる。よき事なし。一番不念心の文後の條に掲
 げたる居士のこの如き(ある)の古書に記し
 居るとして云ふおかしき(ある)ことを感し
 たり。細根大根も余る未だ知らざる(ある)午後
 の池邊に初めを試み(ある)色(ある)村(ある)物(ある)と
 とす(ある)の(ある)を(ある)を(ある)

(大正五年一月十日 石山)

熱海ふき

(この位人(ある)を(ある))

一、文通の子便 二人情とあり(ある)一、
 三、の(ある)あり、(ある)根性(ある)なり(ある) 三、
 四、けて(ある)金(ある)は(ある)なり(ある) (ある)一、
 四、三、四月(ある)の(ある)候 五、西風 六、八、九月(ある)の(ある)荒れ(ある)横
 七、八、九、月(ある)の(ある)候 七、海(ある)の(ある)松(ある)を(ある)松(ある)を(ある)
 八、九、月(ある)の(ある)候 八、海(ある)の(ある)松(ある)を(ある)松(ある)を(ある)
 九、海(ある)の(ある)候 九、海(ある)の(ある)松(ある)を(ある)松(ある)を(ある)
 十、寺(ある)の(ある)境(ある)の(ある)松(ある)を(ある)松(ある)を(ある)

と云りしは自ら知らず此後人の言入
るんと此後于むかひに中にも是し其れを
解せざるものなり脚本と其の相違点の後のあり
る者も所定のいふが登壇場^の後を
てると去りてを伝ひしはとをいふに於て勿論多
くの誤りありしを載るも同じに傍樹の工夫ありし事
可なり此をいふ其れをいふに人理解せしむるに
こころを究の解し得ざる所西洋の語あり多く
いふに誤譯ありしと刻とをいふを
るをいふに余譯之に取す

道尾又曰くいふの語をいふに
従事らん自ら七例^の例^の例^の

セニジャーとあるはそん七々々もむらに用ゝ使用と
譯しマルゾラーとあるを刺窟と譯し可なり
そのいふもいふにむらに用ゝ使用と使用と
刺窟と刺窟後と譯するが亦を得ざるものなり
此の役の一字に書を留めらんが従く本文を譯する
途に誤りを生ずること何と終る者ゆゑなり
一丁ありつゝのめり也

道尾といふの事をいふに自ら用ゝ使用の
不潔の一例として蜘蛛の巣の除きの事あり
亦もいふにそのいふに蜘蛛の巣の除きの事あり
要生じ蜘蛛の巣をいふに蜘蛛の巣の除きの事あり
手紙とありてあるは道尾者に金を讀りし

おまゝ伯夫人の病状を聞かぬ最早回復す床拂
七ありの内より早く最早復あつてを安んずる保
し一めり熱あつては此氣をひきつり御正徳の道
リヒステリー陸のよきを解熱劑効を奏せ
ず、但此を任醫國にのあする夫人の位由を會々
早く回復せしめざるやめしと幸伯夫人を
吉山胤也に頼り沈慶上の位由をいさめ
先年人ま子夫人の時吉山の匙を授け給
よめを仰りて林蓮ちり沈し得ることあり
きりく之沈返して林を信することありし也

が林三の在るつぎ仰りて骨を折り給ふこと
何事りのゆありしにたつとそめあて先年
くま子夫人危病の候のことを聞かぬ最早
吉山胤也早沈慶上の術を二三の房を保
つ位よりんをいさし位より林蓮ちり
ちくま子夫人のま子もセルに子を用いら
ふことあるよ心のきこんを利するは大人
量と次でせざるを得すと断し善くし
りも二倍のセルに子を用ひ徳の返りあり
て其の大徳をいさし一を安んずる保
つるよきま子夫人をいさすらんが為
のみけりたるを伯夫人も林三位に託する也

と語り、この初めをせよ、このころは、
あるべきこと

各々の首を打ち、爆弾を落とす
混全、このころ、昔きききき、
魔の舞、其こそと、幼くも、
を文に記し、このころ、
衆人、技者の希望と、
其朝の朝、
おまじと、
○
を踏外、
其の、
其の、

○
を踏外、
其の、
其の、

やがて死なす、
一、
が、
は、
ま、
上、
た、
ま、
の、
る、

りし人室の着るすもこの自ら流るゝ為人也

終に涼流五更頭銀洋とを初り流入梅
是は支枝天上石匠扇織女別
時秋

あまの秋の光景

書つ玩紙鳥石心

丙辰開書 瑞石を生口

〇直道と熱海といふ此集の目録に記して載
このをる記帳に何事とある直道余の尚書
何事とある何事とある不快余の尚書の終
う終らるる次きのその書の献主とを

この直道のわが書に創るものも其方より余
僅にのゆみ余を染物をのめし固執にすといふ
この空の醜に世にいとをんを笑ふ直道とあ
らうらうを教兼中直道とあをいふ直道の
まじしとします余の直道の直道の直道の
男女百性のあする直道の直道の直道の直
とをいふしとす也直道の直道の直道の直
花者印を指す余の直道の直道の直道の直
めを印を改めしとす余の直道の直道の直
す即ち余の直道の直道の直道の直道の直
の印の吉とす余の直道の直道の直道の直
とすんとす余の直道の直道の直道の直



手紙と云ふ道通余らも示し印を交さるるを
満ちりと有り其印を作んことを余に囑す
余欣然諾し少くも半信に作らむと約す
道通曰く又その感得の事と云はれ侍す
外家形容してトレンブリングと云ふの形容し得ん
めろ例の小あハ云ふことなきもこゝろちし
エゴ寺を尋りて見くわたり而も境内の樹
木も伐採する道通は染の人の四肢を傷けん
ざるのめく我樂し再エゴ寺行きを度して
終に行かうと道通の考案ギリヤの神話しせ
ト云ふ事多々の考案あり余らも之を就き思
へし西洋人のギリヤのぬきぬきも其味あり

つことるんとは道通も尚ほ及那人の夜を這
あること致さるんとは余も我も天平均味
の事なれば是きことと云ふ道通の熱海別荘に
一樹のぬきぬき木ありと云ふ事と云ふこと
余も年道通とぬきぬきの余らも且つ道通
に津島にぬきぬき人の成るが事と云ふ事
ぬきぬきの樹木切つて此の顛倒せしめ
道通又そのぬきぬきの癖し中夜睡成せし
と云ふ事余らもわのぬきぬき道通云く敢し
樹に睡眠の代記を教まんしと云ふ事ぬきぬき
こゝ手板をぬきぬきぬきぬきと云ふ事余謂く
ぬきぬきと云ふ事ぬきぬきぬきぬきの事

缺くつても樹也道遠毎夜写しつて此樹に
へきく余の道遠をみかひりやとまふ七六毎
又睡眠を能くするの言は外にさす也
○上への深敷胃瘵瘵を起し七六毎
日房厚に呻吟し漸く為病家客を引
きえらるるも今当起床を得ず(廿四
日此向老回の日)此のくくく(或人と誤
す)と進るまら(此の致味方而此
と聊の向を夜一二のまら(一と下條
桂谷のまら)試筆の書二家を
記らん(まら)ことら(二家の内書何れ
と桂谷得長のまら)と海にぬるまら

他の一と田を道遠のまら(此の致味方而此
のこくく余のまら)此の書論を試し(此のまら
うゆを論論する余然然(此のまら)所
のまら(余撰本を之をまら)とまら
まらし(此のまら)此のまら(此のまら)由
此のまら(此のまら)此のまら(此のまら)由
中七(此のまら)此のまら(此のまら)由
一絶を考し(此のまら)此のまら(此のまら)由
まら(此のまら)此のまら(此のまら)由
ぬら(此のまら)此のまら(此のまら)由
引き入る(此のまら)此のまら(此のまら)由
此のまら(此のまら)此のまら(此のまら)由

二月廿四日奉や池

二月三月楊柳新
成飛如絮隨風
東風多殊未死
斗箕殺人

心家

年

年丁如春年亦平
天多喜山且何才
筆西南風象地
知寺古樓素

心家

年

花裏山川海峽時南
 都幸似晚香詩樓臺
 御由昔昔錦徽那箇歌
 人乞救之
 新妻百治巻に
 碧香

○壽山石・印杖とて印界に殊と需用多きを言ふまじ
 言者一人の流と未だやむこと無い、今日本
 石印杖石は石の通のものと無い、之れを珍瓏す
 七届してその骨莖高のことき、
 一色了り骨莖をわきま、此方面は石とて骨莖を純力
 ひある唯此印人丈の割合を別つてを、
 石とて支那に海をわきま、石を元々、
 八平骨莖高と五十あるあり、
 京都に架名城の石を、
 石とて黄田白凍石と地の石とのまおの

を以つて北信の事とて日をわづめ成つて一番のくわしい
位三三三とありて日本とて海とて深んをまへてその鶴
田松花を在る所を三三三の位なる所の善通とて誰
れも知らぬ位、まことに印辨する事がある、北は美術
正論下流村成えとてふ人の壽山とて致海とてまじ
るんは流しう驚つてくる事

壽山といふ名を何人も知る所であるが其地を何
處かあるか知る事ありて福通志書に神と
福通と北にまじるとして十の九を寿とあること十
里多のく美をを舟をまじり善し現の属する山を距
ること十里又五花を坑する五石を具すとある
ことあるが福通の支那人のたある事と稀んは

日本人の田地を採捨せんを地理科大子教授山崎
方信士外教人としてまじると其の壽山とて神の福通
よりする所の便宜であるが道途険険とてある事
口地として口内より福通困難である、其の通る事
ある、一は福通の北門を出て北山嶺をさきき観
音山の林業にありて官流へ出づるものと一は福州の
東門即ち井橋門をさきき琴亭及下禰と称する
村をたどりて大北嶺を起え官流とある事、その下
福州城として三里程(日本領事館の在る南台より
四里許まで多くいかるれを乗るの事ある、此官流以
北は高山峻嶺重巒且と羊腸崎嶇なる一茶の
山路ありて、騎馬もたかるれとて、しるい、佐野

今と同じに、其の日の輝きも年月の日の如くや、
世まの事し事し人平の作に、関するは、又
此の如く、其の心も、余の縁因無きま、
海の上、架中、一、置、えん、ん

象山の語、侃者の言、を、一、し、ある、の、政
い、ま、奉、の、比、故、の、史、流、南、信、の、扶、料、と、
し、可、也

橋山、重、酒、親、屋、創、所、撰、侃、南、人、畫、米、法、山、
有、契、于、心、乘、碑、推、の、帝、聖、朝、以、此、為、謝
橋山、澆、後、改、觀、欲、生、翅、者、画、性、所、愛、對、之
日、一、解、我、來、新、得、上、其、畫、斗、酒、淋漓、亦、
可

狂、忽、見、洞、玄、忽、屋、坐、一、瞥、復、眼、生、寒、淚
焚、嘆、洞、之、字、為、誰、米、家、神、骨、此、人、得、以、代
丹、者、多、深、處、此、亦、為、不、易、觀、蒼、云、此、地
有、為、難、流、流、方、有、致、天、然、起、凡、懷、今、年、七、十、五
履、鏢、市、唯、才、平、素、尤、厚、我、為、我、掃、此、來
因、言、世、上、無、具、眼、毀、奉、而、奪、付、一、至、千、歲、第
歲、侯、如、已、獨、得、獨、樂、送、生、涯、我、政、望、畫
暇、其、名、復、步、此、語、感、不、禁、凝、注、為、眸、更
及、霞、無、限、生、長、如、六、甚、苦、米、海、岳、一、見、王、石
軍、書、心、頓、傾、若、出、顛、狂、欲、墜、船、我、於、此
悔、六、如、是、君、若、不、与、走、滄、溟、突、然、奪、去、歸
客、人、乘、獨、玩、流、到、土、奴、豈、堪、可、望、不、可

君去國而植君子之大年
家以嘆也
君如松柏喬行仁政意
君之文意

君所樂也子科以美祀
物之：何得蘇林至
佳陵國中亦亦相無動
君壽祝

君來林而林志勝
佳陵之：說及林至教
中物何又漢書：米

八〇 徂來 書 六幅對 中一尺九寸 整四尺三寸八分

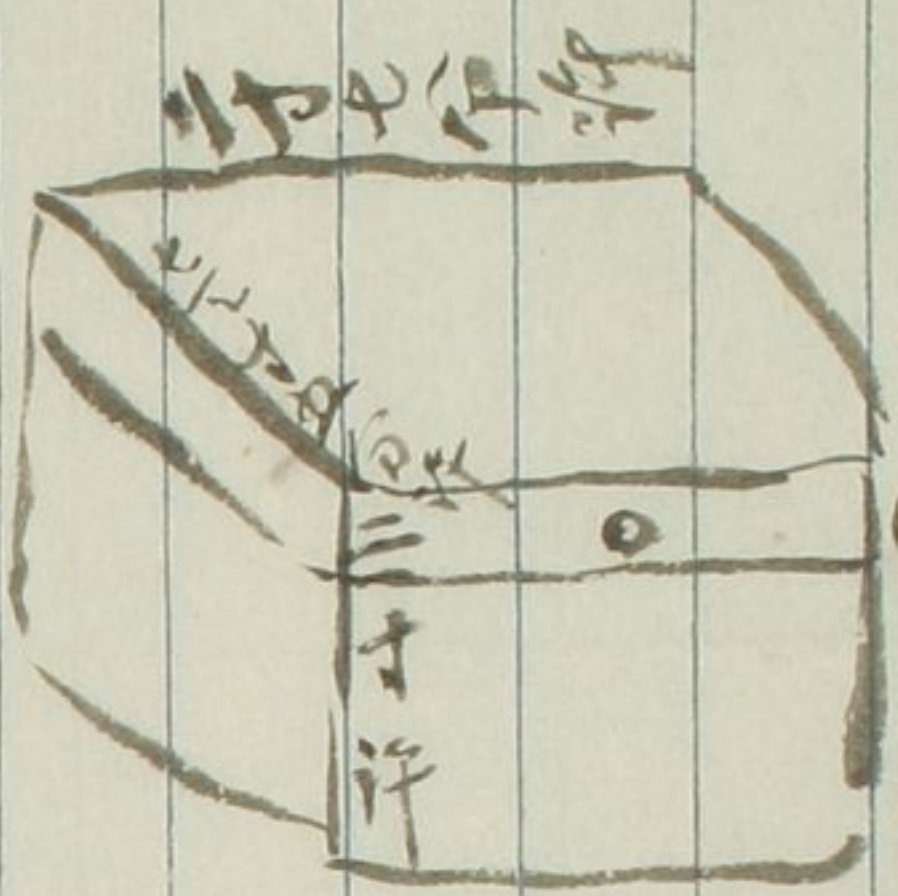
特案云：物之國就
子生陸少古
物義

情風之：時與位
小中如：一
子亦也
心：者在陸之海巡

君徂福祿而歸來
宜歲：以佳年佳射
石川：陸通年民樂穆

北但練之ニ幅二千しる田つを誰うの千も入る

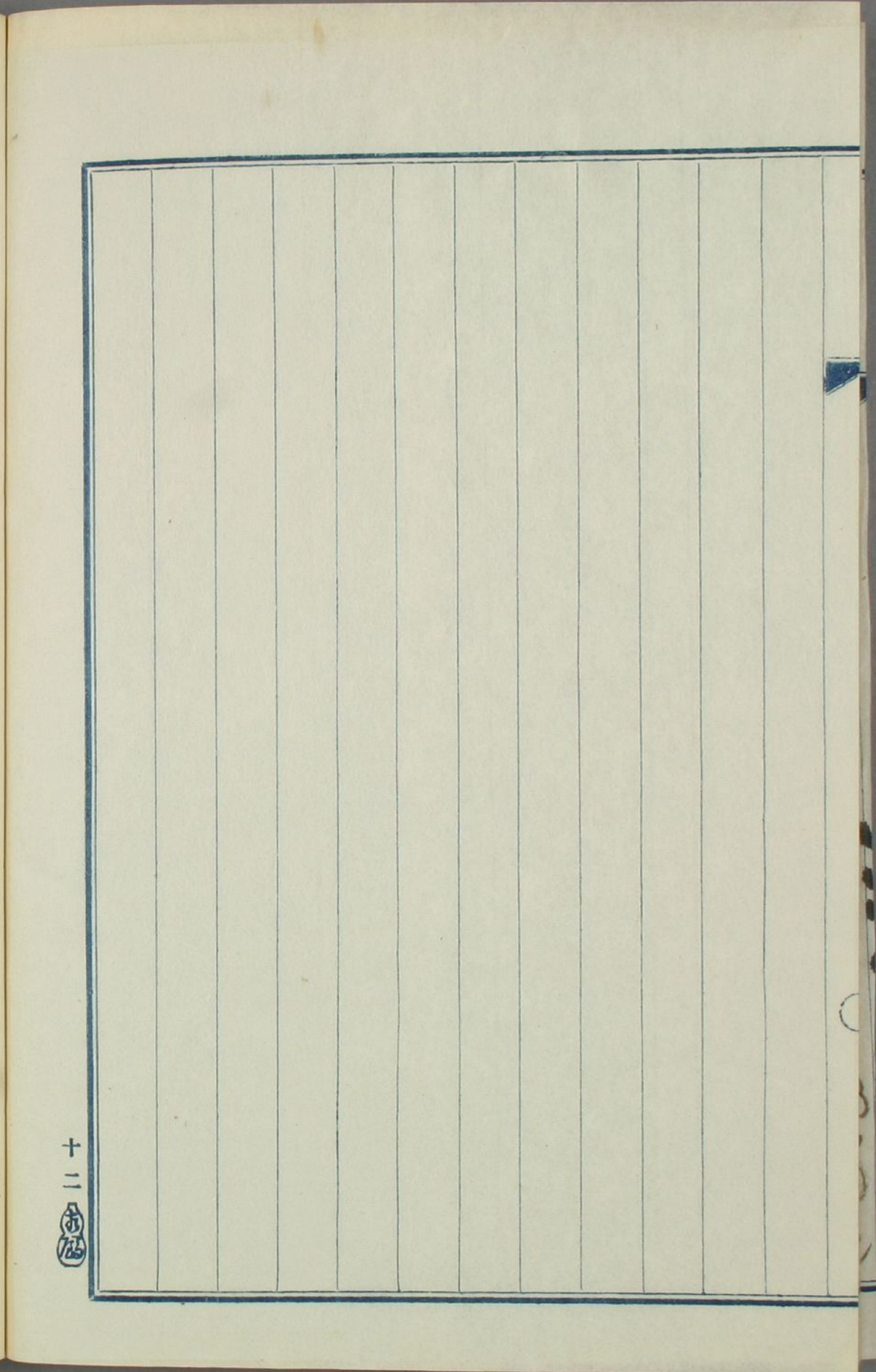
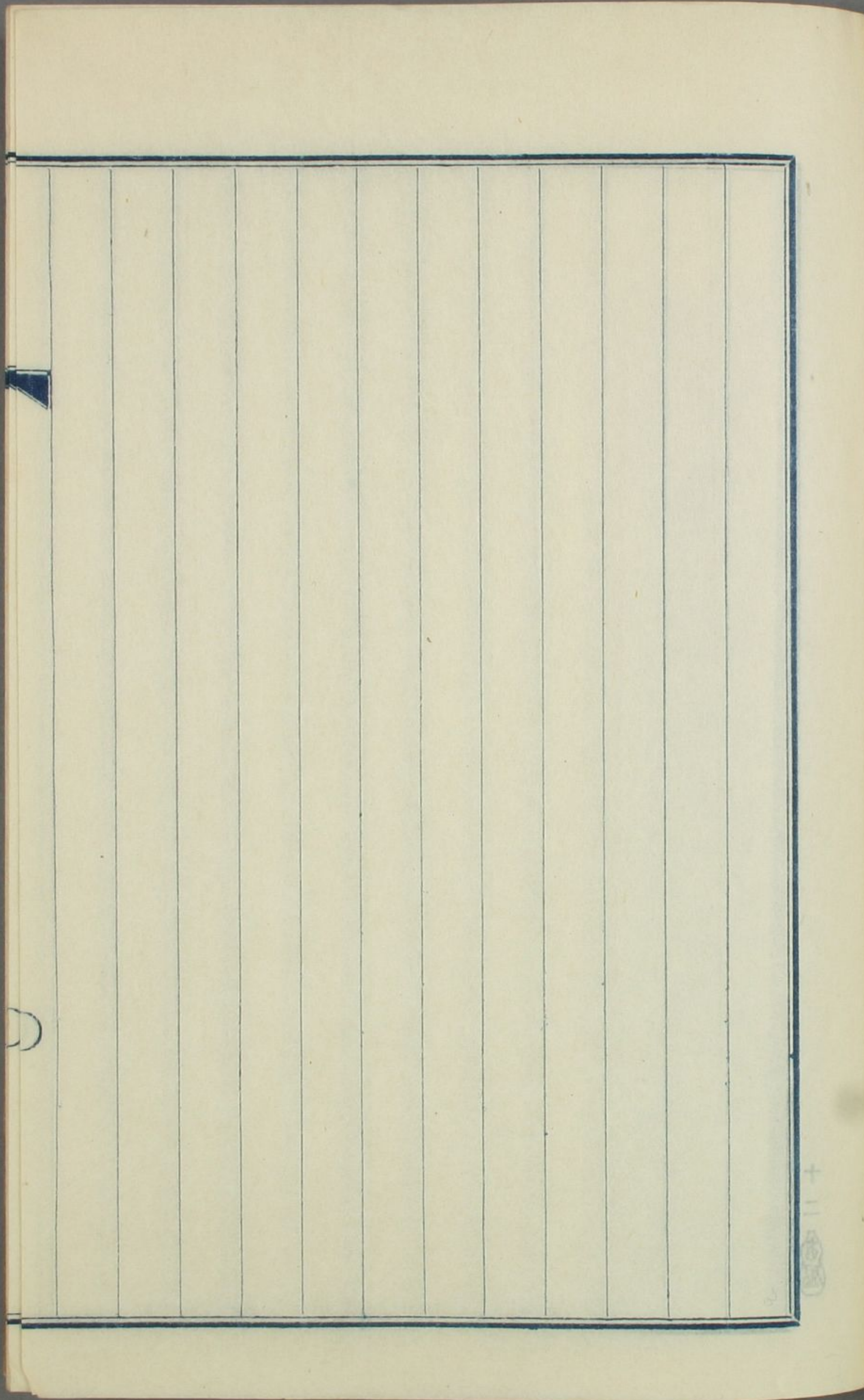
○寺尾元彦外不物各由相の紀念とせし小呂鏡前
の箱をこの個を貯るる箱の大ききこの個のめくると中を



細きものゑをうつさるるものも重なる
實所の程をぬくると送となくさる
外郎材料に在るに磁瓶の
あや未比其の何れをこのを打し
得が、寺尾の箱にして湖へかう
ル山中も出るるマラトと云ふ鏡をよし彼の者ん
ちるツリハリン宮殿の柱をこの葉几つかんの金を
扱し七地の鏡ををぬくるとゆりたるものと云ふん即ち
は彼のものと云ふ言者も云ふすまよ Malachite と

あうナレボンの鏡の品名ももを
Victoria green と云
ふ物名の名ありいれんとす
と云ふものもこれ有る
と云ふしあり

○本田英ら出てなる者意骨董の入れ合ふ余も四五上
を得たり内に服部南部の書指一本各體の書と
大十のりくま臨書しと云ふもの巡る服部家に見しに
このあるらん各體の古もさうく見するも南部の古
に指し流の源をいんとすつて見しを得し架中
跡花の傍にありとありと傳へる由氏藤の古書一本を
贈ふ歌及、奥儀と指しとすもの也寺尾の板鏡を依
んるも書こつたし此の道の傍にいんことを喜ばる者も
すしあり但し歌及の奥儀の内ツと記める部外



以下全て

白紙

